

声を発するだけでなく 耳を傾けるために—NPO 法人つくりました—

馬場基彰

(京都大学大学院理学研究科／白眉センター bamba.motoaki.y13@kyoto-u.jp)

1. 何をすれば科学が元気になると思いますか？

2022 年 2 月 22 日、日本科学振興協会 (Japanese Association for the Advancement of Science; 以降, JAAS とよびます) という NPO 法人 (特定非営利活動法人) が設立されました。私が設立代表者の一人で、もう一人は小野悠さんという都市工学の研究者です。研究者だけでなく、学生、研究機関職員、学校教員、塾経営者、研究支援業の方々、弁理士、科学コミュニケーター、ジャーナリスト、行政に携わる方々など様々な会員がいます (本稿執筆時点で正会員 223 名)。分野も自然科学・人文学・社会科学・工学・医学など様々で、世代や国籍も多様です。JAAS は、人類の福祉向上と持続可能な社会のために、科学 (技術やイノベーションも含みます) を元気にする様々な活動を行います。

皆さんは、何をすれば科学が元気になると思いますか？私たちは研究者であり、本業である研究と教育こそが、まずは肝心です。最新の研究成果や科学の魅力、研究活動がどういったものかを、こどもや学生、市民やジャーナリスト、また行政に携わる方々に伝えることも大切です。プレスリリースを出したり、科学カフェを開催したり、YouTube で動画を配信したり、アーティストと協力して魅力を発信する研究者が増えてきています。

あれ？伝えることばかりに意識が向いていませんか？私たち研究者の考えを市民や行政に理解してもらえば、社会がより良い方向に行くと思いませんか？社会の声に耳を傾け、自分の考えを柔軟に変える気持ちはありますか？学生の声に耳を傾けていますか？大学の職員や経営陣はどうでしょう？自分とは異なる考えを持つ人を、何も分かっていないと決めつけてはいませんか？

本稿では、JAAS 設立に携わった私の体験をお伝えすることで、私たち研究者が何を意識し、いま何をすべきか、皆さんが考えるきっかけを提供できればと思います。

2. 設立活動を始めた経緯

私が JAAS 設立に繋がる活動を始めたのは 2018 年の秋になります。任期付きの職に就いており、講師や准教授の公募に何十件も応募し (最近では当たり前ですが)、不採用の通知を受け取っていました。年齢は 30 代後半で、若手支援制度の枠にも入れなくなりつつあり、制度自体の実効性にも疑問を抱いていました。

そんな時に、科学技術基本問題小委員会というものが自民党で発足して活動を始めた、ある元参議院議員の方の

ブログで見かけました。「官僚や政治家は (科学や研究について) 何も分かっていない」という愚痴を、研究者同士の飲み会で聞いたことしかない私には意外に感じました。自分の声をきちんと政治に届けようと、その元参議院議員の方にメールを書きました。すると、すぐに返事が来ました。「科学技術政策をより良いものにしていくために、当事者である現場の研究者の声を集めて、政治家にちゃんと届けてほしい」という趣旨でした。

そうか、日本は民主的な国なんだから、研究者の声をたくさん集めて政治に届ければ、自分が直面する問題は改善するはずなんだ、と思い立ち、同じような活動をこれまでしてきた人達をネット検索で見つけ、どうやって進めていけばいいですかね？とメールを書いていきました。どうやら問題意識をおおよそ共有していたようで、ほぼ全ての人が一緒に活動してくれることになりました。

では、具体的に何をすればよいのか？これまで盛んに活動してきた人達は、自分なりの答えを既に持っていたようです。日本版の AAAS (American Association for the Advancement of Science; 米国科学振興協会) の設立を目指すことになりました。AAAS は Science 誌を発行していることで有名ですが、科学教育や政策提言、市民・官僚・政治家と研究者との交流にも力を入れている世界最大の科学振興団体です。会員数は 10 万人を超えます。世界各国に日本学術会議のような科学アカデミーが存在し、各国を代表する研究者が、その時々で最も信頼できる科学的知見に基づいて社会に助言・提言する役割を果たしています。一方、AAAS のような団体は、科学を普及させる活動、つまり、科学の魅力や研究のなんたるかを社会に知ってもらう活動、また、科学や研究を誰の手にも届くものにする活動に主軸を置いています。私たちは、日本独自の大きな科学普及団体を目指すことにしました。

2021 年 2 月に日本版 AAAS 設立準備委員会という任意団体を発足させ、広く委員を募集しました。わずか 1~2 ヶ月で 200 名近い委員が集まり、これ以上は取りまとめが難しくなるとして、委員募集は打ち切り、以降は賛同者に回ってもらうことにしました。賛同者は最終的に 800 名以上となり、延べ 1000 名を超える団体となりました。設立のより詳しい経緯などは、参考文献^{1, 2)}をご覧ください。

3. 直面した難しさ：異なる意見を尊重すること

集まった約 200 名の委員と一緒に、設立趣旨書の作成や法人化の手続きを進めていきました。並行して、実際に行っ

ていく活動の検討と実施も始めました。しかし、法人化の手続きは粛々と進めたものの、会の外から見て「活動」と見られるものはなかなか具現化できませんでした。

ある委員が科学の楽しさを伝えるゆるい感じの動画や記事をつくりたいと言い出せば、政策提言の際に会のイメージが損なわれるという意見が別の委員から出ました。一方で、国政選挙で政党や候補者に科学に関するアンケートを実施すると言い出せば、政治や宗教に関わる会だと思われると本業に支障が出るという委員が出てきました。中学校で研究者による職業講話を実施しようとすれば、試しに一度やるのはよいが今後については会全体で要検討という意見が出ました。時事ネタで素早くアンケートを実施してみれば、問いや推論に他の委員から疑義が出されました。

なぜ他の人がやりたい活動を温かく受け入れ、応援できないのでしょうか？誰が悪いのかと言えば、すべての委員の考えを取りまとめて、きちんとリードできなかった、私が悪いのだと思います。ただ、言い訳を述べさせてもらえば、約 200 名の委員は「日本の科学をもっと元気に！」というスローガンで集まった人達であり、その中には研究者だけでなく、本稿の冒頭で述べたような科学に関わる様々な立場の人達がいます。各自の背景も問題意識も様々です。どうすれば科学が元気になるのか？その考えが人それぞれ異なるのです。研究費や研究時間、研究者の雇用に問題意識を持つ人もいれば、アカデミアの閉鎖性に問題意識を持つ人もいます。科学教育に関心のある人、社会での科学に対する意識に関心のある人、科学という概念そのものに関心のある人もいます。

具体的な活動を実施していきたいのなら、価値観の近い人同士、例えば自然科学系の研究者だけで集まった方が速やかに進められたでしょう。しかし、そうではなく、広く委員を募集した時から、多様な会員で構成され、対話と協働を重視する団体をと謳っていました。恥ずかしながら、「多様」であることで自分たちの声を正当化させ、科学技術政策を決めている人達と対等な立場で「対話」したい、そういう発想が設立活動の当初に混じっていたのだと思います。

4. 私たちは結局 何をすべきか

200 名近い人達と交流して私が理解したことは、研究室に閉じこもっているだけでは出会えない様々な人達によって、科学や研究活動は支えられており、各自が抱く問題意識や科学を元気にする方法も様々だということです。人が離れることを承知で、価値観の近い人だけで活動を進めていくか？それとも、時間を掛けてお互いを理解し合うことを優先するか？私たちは後者を選びました。

これは私見でしかありませんが、「自分の考えに従えば世の中はもっと良くなる」「自分のまわりの人達も賛同している」、そのような発想で各自が動き、人と人、コミュニ

ティ同士の衝突が社会の中で起きているのではないのでしょうか。意思決定をする人が代わることで何かが変わったとしても、不満を抱く人が新たに生まれ、世の中の仕組み自体は依然として変わらない。それが何十年も繰り返された結果が、いまなのではないでしょうか。

私たち研究者は、研究と教育が本業です。それだけに集中する研究者も、科学の発展には大切です。そのような研究者を支えるために、他の研究者が様々な活動をする 것도大切です。

さて、最初の質問に戻ります。皆さんは、何をすれば科学が元気になると思いますか？科学や研究を社会に伝えることは大切です。ぜひやっていきましょう。私が活動を始めた当初に思い描いた、現場の研究者の声を集めて行政に届けること、政策提言することも大切です。これも一緒にやっていきましょう。でも、皆さんが自らの思いを伝えたい人達、普段の研究室生活ではなかなか出会わない人達、そんな人達の声に耳を傾けることも意識してみませんか？

では、どこに行けば、そのような声を聞くことができるでしょう。困ったことに、社会にいる大半の人は科学にそもそも関心がなく、話を伺う機会を見つけられません。私はまず、JAAS にて様々な会員から話を伺うことにしています(対外的なイベントだけでなく、会員間の交流会も頻繁に開催されています)。JAAS には、科学に関心のある人が集まっています。それにも関わらず、自分とは異なる考え、耳にしたこともない考えに頻繁に遭遇します。お互いの思いを理解し合い、やるべきことを一緒に考えた後に、対外的なイベントを開催するようにしています。もちろん、価値観の近い人同士で活動するよりも歩みは遅くなりますが、最終的には、より広い範囲の人達にイベントに参加してもらえます。

私たちが大切に思っている科学を元気にしていくためには、科学に関わる様々な人達で集まって、まずは他の人の考えに耳を傾けてみる。そこから始めてみてはどうか、というのが JAAS 設立に携わった私のいまの心境です。

参考文献

- 1) 日本科学振興協会ウェブサイト【委員プロフィール・3】学術の現場の人達が集い、みんなの思いを実現させる組織を作りたい／馬場基彰氏インタビュー. <https://jaas.science/2021/06/21/memberprof-motoakibamba/>
- 2) 春日匠, 馬場基彰, 日本科学振興協会の設立, 科学 92, 398 (2022). <https://www.iwanami.co.jp/kagaku/KaMo202205.html>
<https://researchmap.jp/read0141546/misc/36922591>

著者紹介または非会員著者の紹介

馬場基彰氏： 光と物質の相互作用を理論的に研究。日本科学振興協会 (JAAS) 設立代表者。現在は理事を務める。

(2022 年 10 月 24 日原稿受付)